「反戦の思いを若い人に託して」

比屋根　道子　（８７歳）

神戸市大開町で 1933 年（昭和 8 年）に生まれました。今 87 歳です。ささやかですが私の戦争体験を語ります。小学校 3 年まで板宿小学校で学びました。4 年生から、大阪市の北大江小学校に転校しました。当時頻繁に空襲警報が鳴り、慌ただしい情況でした。

戦況が悪くなる一方で、そのため 1944 年（昭和 19 年）9 月に、滋賀県蒲生郡島村のお寺に学童疎開をしました。6 年生 60 名位と小学校の先生、お世話をするお姉さんたちが 4 か所のお寺に分散して生活を始めました。地元の島村小学校に通学しました。食料はよそと較べれば恵まれていたと思われます。しかし育ち盛りの子どもたちにとって、充分ではありませんでした。

上級学校への受験がありましたので、翌年 1945 年（昭和 20 年）2 月に大阪に戻りました。そして 3 月 13 日、深夜から早朝にかけての大阪大空襲に見舞われました。当時長屋のような家に父、母、姉、私、妹の 5 人が住んでいました。各家には小さな防空壕がありました。大阪大空襲の時、向かいの道路下に掘られていた大きめの防空壕に逃げ込みました。5 歳上の姉と入っていたのですが、入り口から見える B29 の飛行機が、怖くて怖くて生きた心地がしませんでした。

B29 の焼夷弾は花火のように燃えながら何メートルにもわたって落ちてきました。姉は足を痛めていた私をおぶって、少し離れたところにある京阪天満橋駅近くの広い空地に移りました。そこには何百人もの方が避難していました。後になってわかったのですが、私の家は焼け落ちてしまい、辺りは焼け野原だったそうです。父は、家の敷地内の水のない古井戸に、布団や衣類や大事なものを投げ入れて保管したそうです。大阪大空襲は、多くの方々に大きな被害を与えました。幸い私の家族はみな無事でした。

父は軍隊にいた時、上官から酷い仕打ちを受けたそうです。当番兵で作業をしていたら、言いがかりをつけられ、何回もビンタを張られました。私が「何で抵抗しなかったの。」と尋ねると、父は「軍隊では上官の命令は絶対的で、とても抵抗できるものではない」と言いました。

戦争中も大変でしたが、戦後数年間は食糧難で、配給も遅配や欠配（一か月分配給無し）がざらで、闇で買うしかありませんでした。あの頃父は、お茶の行商とか、家で饅頭やカリントのようなお茶菓子を作って売るとか、細々と家族のために働いていました。やはり姉だけの働きでは、祖母や 1946 年（昭和 21 年）に生まれた妹と 7 人家族を食べさせていくのは大変なことだったのです。

私が思うに、もう一か月早く戦争を終らせていれば、原爆が落ちることもなく、ソ連の侵攻も無かったのではないかと心が痛みます。一たび核戦争が起これば

人類は亡びます。若い人達が世界中の国々で平和を願い核戦争をなくす運動をしているのを知って、どんなにか心強く、地球上の人々にとって明るい希望を感じています。